キャラクター名
緋崎 円生

プレイヤー名

シンドローム	サラマンダー キュマイラ	ワークス	UGNチルドレンA	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	17	性別	男
覚醒	素体	衝動	殺戮	初期侵食率	37 %
出自	天涯孤独	経験	仲間の死	邂逅	保護者

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	5	1	0			6
感覚	0	0	0	1		1
精神	1	0	0			1
社会	2	0	0			2

HP	48
行動値	3
(非装備時)	3
戦闘移動	8
全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	2		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
破壊の爪	白兵	6r+2	1	Lv+8		R1　P123
		0				
太陽の若き雄牛(アマルトゥ)		0	1	10		[345]素手データ変更　戦闘移動を行う
└100↑		0	1	11		同上

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

コネ：UGN幹部	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
ロイス:復讐者(アヴェンジャー)	P	N		
死んでいった仲間たち	P　友情	N　悔悟		
霧谷雄吾	P　尽力	N　恐怖		
シナリオ:道原五木	P　執着	N　嫌悪		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　4	残り財産P：　3

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
C:サラマンダー	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果：C値-Lv(下限値7)								
巨人の生命	3	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：最大HP+[Lv*５] 基本侵蝕値+３								
ハンティングスタイル	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：シーンLv回 戦闘移動を行う								
破壊の爪	2	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：素手データ変更								
完全獣化	2	6	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：シーン間、【肉体】ダイス+[Lv+2]								
炎神の怒り	2	3	メジャー	-	-	-	-	
効果：判定ダイス+[Lv+1] HP-3点								
クロスバースト	2	4	メジャー	-	-	対決	80↑	
効果：攻撃力+[Lv*4] 判定ダイス-2								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

ひざき えんしょう/灼熱の復讐者

「俺は、必ず殺すと決めたんです。あの日から、あの時から、俺は、あいつを赦すわけにはいかない。――絶対に」

【キャラ詳細】
とある放火事件によって家族を喪い、天涯孤独の身となったところをUGNに素体として選ばれた少年。
幼いころから念発火能力(パイロキネシス)としてサラマンダーシンドロームに目覚めており、この放火事件とは自分自身の能力の暴走によって起こったもの。しかし己を愛してくれた両親を己が手にかけたということを受け止めきれずに自ら記憶を改竄し、「自分の両親は放火事件によって命を奪われた」として自分を納得させている。

UGNチルドレンとなってからは、厳しい訓練の中で何人かの友人に恵まれ、共に任務をこなしていった。
途中で心が揺らぐことや死にかけたことも何回かあったが、共に戦う仲間によって乗り切っていた。決して楽ではないが、苦しいというほどでもなく、つまり――彼は満たされていた。
そんな或る日のことだった。あの男が、「道原五木」が彼らの目の前に現れたのは。
その日はなんてことのない鎮圧任務だった。すべてが終わって、一息ついた時、イレギュラーという形で彼は緋崎円生と数名の仲間の前に現れた。
彼はその能力で仲間たちの心を操り、歪ませ、捻り、互いの不信を、互いの不安を増大させて殺し合いをさせた。
緋崎円生がなぜ無事だったのかと言えば、彼自身、「自分の心を騙す」ということに慣れてしまっていたからだった。サラマンダーシンドロームによる体温調整や自己暗示、そういったものによって道原の干渉からは逃れられたが、彼の干渉の結果からは逃れられなかった。
呆然とする緋崎円生の前で、道原五木は嘲笑を残して去り、遅れて駆けつけたUGN職員によって彼は助けられた。

――その一件以来、彼は道原を狙う復讐者となった。
「あの時自分に、もっと力があれば」